

特集

障がいのある方の「働く場」

地域で生き生きとくらすために

障がいのある方の人口は、全国で約936万人といわれています（参照：内閣府「障害者白書」）。千歳でも、総人口に占める障害者手帳所持者の割合は、約5%と約20人に1人は何らかの障がいのある方です。障がいは病気や事故などによって、誰にでも生じるものです。今月の特集では、障がいのある方の働き方や場所、支援者の取組について紹介します。



あんしんマーク
子どもから高齢の方、障がいのある方や妊婦など誰にとってもやさしいまちであることを願ったマーク

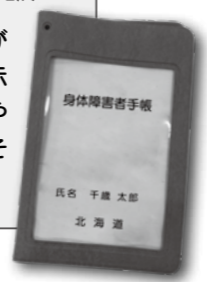
【詳細】障がい者支援課 障がい福祉係 ☎(24)0327 ☎(23)6700

障がいのある方の働き方

障がいのある方の働き方には、民間企業などに就職し、労働契約を結んで働く《一般就労》と福祉サービスの枠組みの中で作業や訓練などを行う《福祉就労》があります。《福祉就労》には、就労の方向性の見極めを行う《就労移行支援》、一般就労へのステップアップを行う《就労継続支援A型》、就労に向けて知識や技術の向上をめざす《就労継続支援B型》があります。

障害者手帳の種類と等級

身体・療育・精神の3種類の手帳があり、それぞれに障がいの程度を示す等級があります。障がいの特性や重さは一人一人異なることから、その人にあった支援を行います。



※イメージ

《就労継続支援A型》、《就労継続支援B型》では、企業や団体などから受託したタオールのクリーニングや施設の清掃作業のほか、小物や焼き菓子などの調理制作・販売といった施設の強みを生かした自主事業を行っています。また、インターネット通販業務やパソコンなどの解体および分別作業、パソコンを使った事務作業も行っています。これらのほかにも木工品製作、除草、除雪、廃品処理やお弁当販売、飲食店経営など多種多様な事業を行っています。

■ 市内在住者の就労支援施設利用者数（人）

	H30年度	R1年度	R2年度
就労移行支援	10	7	13
就労継続支援（A型）	125	121	124
就労継続支援（B型）	264	270	299

個性を生かした働き方を支援する場

障がいのある方が、福祉就労を行う《就労支援事業所》とは、どのような場所なのでしょうか。

《支援センターゆみな》

パンの製造・販売やチラシの折込作業などの仕事を通じて、障がいのある方の生活をサポートする《支援センターゆみな》（特定非営利法人アシストセンター「ちえりす」）。「皆さん仕事を楽しんでいます。自発的にお菓子のレシピを調べて新商品を作ることもあります」と代表の清水さんは嬉しそうに話してくれました。

《いずみワークセンター》

「はたらく」ことを通じて地域生活に必要なスキルを学ぶ《いずみワークセンター》（社会福祉法人千歳いずみ学園）では、クリーニング事業やパンの製造・販売をしています。また、この事業所では、支援B型だけでなく、一般就労に向けた《就労移行支援》も行っています。清掃や書類整理などを通じて、就労に必要なスキルを養います。ここから市内の企業に一般就労する利用者がいます。

《ラポールハウストセ》

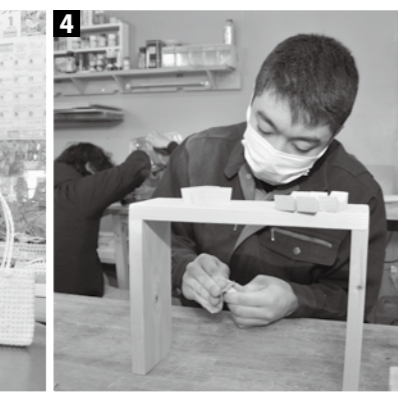
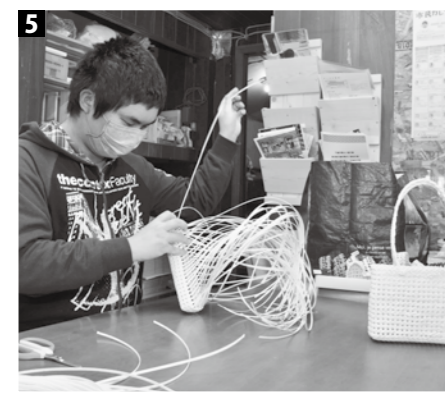
木工品やエコクラフトの製造・販売を行う《ラポールハウストセ》（特定非営利活動法人ビューティフルライフ・サポート）では、利用者が工房内ですべての作業を行います。「自分が思った形の作品を作ることが木工やエコクラフトの魅力」と利用者は語ってくれました。

どの事業所でも利用者の皆さんは、自分のペースで作業をしていました。黙々と作業をする方やみんなとコミュニケーションを取りながら一緒に作業をする方などやり方はそれぞれ。やり方は違いますが、皆さんに共通していたのは、真剣な表情で作業と向き合う姿でした。



◀市内の就労支援事業所は、コチラで確認できます

1 2 3 《支援センターゆみな》の作業の様子。午前中はパンの製造、午後からは、《生活情報紙ちゃんど》のチラシ折込作業などを行っています。
4 5 《ラポールハウストセ》の作業の様子。スマホスタンドや箸置きなどの木工品やエコクラフトのバッグを手作りしています。
6 7 8 9 《いずみワークセンター》の作業の様子。数を数えるのが苦手な方でも番号をふる工夫をすることで、ミスなく作業をしています。自筆で書いた目標を達成するため日々頑張っています。《就労移行支援》の利用者は、パソコン作業や書類整理などの職業訓練を受けながら一般就労をめざしています。



障がいのある方の働く場所のひとつとして農業が注目されています。

《農福連携》とは、

農業と福祉が連携し、障がいのある方ははじめとする多様な人が、農業などの分野で活躍することを通じて、自信や生きがいを持つて社会に参画していく取組です。農福連携に取り組むことで、障がいのある方の《働く場》や《生きがいづくりの場》を生み出すだけでなく、担い手不足や高齢化が進む農業分野において、新たな働き手の確保につながる可能性もあります。



米澤 緒子さん
就労継続支援 B 型事業所 晴レルモキッチン

「困っている農家さんを助けたいという気持ちが大きなやりがいへ」

「これまでできなかった作業ができ、生産力が向上しました」

農業×福祉

大川 聖士さん
大川農園

【大川さん】道央農業振興公社から「農福連携」を活用してみませんか」と誘われたのがはじまりです。その後、「やませみ」を通じて米澤さんと出会いました。

教えてくださったので、すぐに上手にできるようになりました。

に「明日は30ケースぐらい穫れますよ」とLINEで流すと「うちの事業所ではこのぐらいできます」と返信していただきました。

今後の課題は、畑での作業をどこまでお願いできるかだと思います。今回お願いした施設内就労よりもハードルは上がると思いますが、「暑すぎると大変」「重たすぎると大変」「足場が悪い」など畑特有の環境があるので、どのような作業がマッチするのかを事業者の皆さんと調整していくことが重要だと思います。

【米澤さん】昨年5月ごろに《やませみ》から大川農園で収穫されたピーマンのヘタ切り作業ができる事業所を探しているとの案内がありました。畑に行かず、事業所内にピーマンを持ち込み、ヘタを切るという作業内容でしたので、利用者のみなさんと相談し、引き受ける事にしました。

【大川さん】最初に、米澤さんやほかの事業所の職員の方に畑へ来ていただき、打ち合わせと具体的な作業内容を説明しました。その後は、グループLINEで、作業の様子を映した写真を見ながら「もう少し深く切ってください」など作業の指導を行いました。

【米澤さん】前日に大川さんから収穫数の連絡がくるので、次の日に向けて心の準備ができました。普段は8ケースしかやらないのに、みんなで相談して「明日は12ケースやりたい」という目標をたてることもありました。限られた時間の中、チームで協力して目標を達成できたことは、大きな喜びにつながりました。

【米澤さん】今回は、大川さんが困っていることと、わたしたちの事業所の強みがうまくマッチングしました。市内には、たくさんの方の事業所があり、さまざまな特性を持った方がいます。農家の皆さんにお願いしたいのは、「この作業は無理だろうな」と思わず、どのような作業で困っているのかをお声かけいただければと思います。障がいのある方の個性を生かす工夫ができれば、まだまだ農家さんをお手伝いすることができると思っています。困っている農家さんを助けたいという気持ちが大きなやりがいにつながります。

【大川さん】コロナ禍だったので、畑の出入りを極力減らしたほうがいいと思い、事業所に持ち帰っての作業をお願いしました。トイレや休憩所など、畑での作業環境が整っていないかつたことも理由のひとつです。

【米澤さん】手先にあまり力が入らない方がいましたので、大川さんに相談し、少ない力でも綺麗に切れる道具を用意しました。少しの配慮で上手に切れるようになり、その方は徐々に自信がつき、リーダー的存在として責任感をもって働く姿が見られました。

【大川さん】農福連携を行うまでは、自分たちでヘタ切りができる分しか作れませんでした。今後、事業者との連携が進めば、ハウスの棟数を増やしていけると実感しています。また、ヘタ切り以外の作業に時間をつかえるので、これまでできなかった作業ができ、生産力向上につながります。

【大川さん】農福連携を行うまでは、自分たちでヘタ切りができる分しか作れませんでした。今後、事業者との連携が進めば、ハウスの棟数を増やしていけると実感しています。また、ヘタ切り以外の作業に時間をつかえるので、これまでできなかった作業ができ、生産力向上につながります。

【大川さん】収穫する前日、生徒が、現場実習を繰り返すうちに、今では状況判断しながら挨拶や相談ができるようになりました」と振り返ります。

【大川さん】収穫する前日、生徒が、現場実習を繰り返すうちに、今では状況判断しながら挨拶や相談ができるようになりました」と振り返ります。

【大川さん】収穫する前日、生徒が、現場実習を繰り返すうちに、今では状況判断しながら挨拶や相談ができるようになりました」と振り返ります。

地域と連携し、働く力を育む

千歳高等支援学校の取組

平成25年に、「志を持って社会を創る人間の育成」を教育目標に掲げて開校した《千歳高等支援学校》。ここでは、生徒が、学校や家庭、地域での生活の中で、社会生活に必要な働く力や生活する力などを育んでいます。進路指導担当として、日々生徒と向き合う齋藤芳朗先生に話を聞きました。

千歳高等支援学校は、職業学科を設置し、就労をめざしたカリキュラムを組んでいます。授業の半分近くを占める作業学習で、生徒はさまざまな知識やスキルを身につけます。社会に出たときに実践できるように、現場実習を行っています。実際に働く中で課題をクリアし、次の目標をみつけステップアップしていきます。また、職業スキルだけでなく、挨拶などのコミュニケーション能力を高めることも大切にしています。「入学したところは挨拶ができなかった生



革製品の加工作業風景。市役所職員が身につけているネームプレートは生徒の作品です。

徒が、現場実習を繰り返すうちに、今では状況判断しながら挨拶や相談ができるようになりました」と振り返ります。学校では、就労して終わりではなく、定着につながるフォローを大切にしています。卒業後、3年間は職場へ巡回訪問し、職場の方や本人に困ったことがないかを確認しています。「先日、卒業後3年以内の卒業生で同窓会をした際、みんないい表情でしたね。1年ぐらい働くと社会人の顔になります。話しているも成長を感じられました」と齋藤先生は笑顔で嬉しそうに話します。最後に、「自立した生活ができるよう、いろいろな力を身につけ、社会の中で自分の力を試してほしい」と在校生や卒業生にエールを送ってくれました。

一人一人の能力や適性にに応じて継続して働ける支援を行います。

どのような相談が寄せられますか

「一般就労を希望する方からの相談が多いです。話を聞き、就労に向けて準備が整っていないときは、一般就労に向けて訓練するための就労支援事業所を紹介します。また、就労しても長続きせず、転職のサイクルが短い方もいますので、長く勤めることができ、定着支援にも力を入れています。最近では、新型コロナウイルスによる休業や時短勤務の影響で、心身に不調をきたした方の相談もあります。

どのようなサポートを行っていますか

障がいの特性は人それぞれなのでお話を聞きながら、一人一人にあった支援を心がけています。「職場の雰囲気がかたわりがある方」、「光や音が苦手な方」などいろいろな方がいらつしやいます。採用されて働きはじめたものの、環境が合わなくて辞めてしまうことは避けたいので、事前に関心を持ってもらい、場合にによっては企業に実習をさせてもらうようお願いをしています。障がいのある方の能力や適



就労推進室やませみのだ 野田 雅裕さん

性にあつた仕事を探し、できることが少しずつ増えていく様子を見ると嬉しくなります。わたしたちはその人が持っている得意・不得意を見極めながらアドバイスをしますが、最終的には本人の意思を尊重し、自ら決断できるようなサポートを心がけています。その人が持っている可能性を引き出し、社会で生き生きと働けるお手伝いをしていきたいです。

ご利用の流れ

- STEP 1 【受付】
電話で相談日を調整
- STEP 2 【相談】
やませみで詳しく話を
お聞きします
- STEP 3 【支援準備】
長く働き続けるための方法を
一緒に考えます
- STEP 4 【支援開始】
就職に向け、必要に応じて
サポートを行います
- STEP 5 【定着支援】
働きやすい環境づくりを
サポートします

■相談日時 ⑩～⑫ (8:45-17:15)

■利用料 無料

■場所 〒066-0065

千歳市春日町3丁目5-1
地域総合支援センター
いずみの杜・春日1階

※事前に電話 ☎(25)3990、☎(25)3991、
メール /yamasemi@izumigakuen.or.jp
でお申し込みください。